E—12 米国の主婦における生活形態と家事とのかかわりについて

○茂又陽子　㈱住環境研究所　大久保千鶴

米国に旅行する機会を得て主婦の台所を中心とした生活形態を通じて，家事とのかかわり合いを比べるために調査を行った。今回はアンケート用紙の配布により書き込み方法と面接による方法の調査を行った。期間は，1976年11月26日から1977年1月14日の約50日間で米国主婦113名を調査の対象とした。実施地区は，6都市及び周辺で知人をたよりに地区を選出した。アンケートの収集は個別訪問，集会場所での一斉実施と郵送による方法をとった。調査対象者の平均年令は48.7才で，生活行動の分析を行うと朝食の準備が22分昼食が21分夕食は60分で食事は朝食21分昼食22分夕食は36分でNHKの生活時間調査と比べると朝食夕食の大差はみられない。米国での食生活は冷凍食品や缶詰製品の活用，オーブン等を利用しての調理，後片づけは，皿洗機を利用，収納の整備などが作業を短時間にするはずであるのに対して意外な結果ではあったが，それは食生活の形態の差によるものであろう。生活時間をみると家事作業に費す時間が少ないのに対して，対外活動や趣味の時間にむけて有効な時間の使い方をしている場合が多いのが目立った。

所持している耐久消費財では衣類乾燥機の80％，大型冷凍庫の70.6％，食器洗機の58.7％ディスポーザー55％が活用されている。また必要と考えられている設備としても，これらが高い率を示している事からも主婦が家事作業の面で省力化を志している事がうかがわれる。また住まいの間取りを考えるうえで台所の占めるウエイトは大きく，単なる調理作業の場ではなく家族の対話，家の応待，主婦の情報活動の場として存在していることがみとめられた。